

互惠的利他行動文脈が記憶探索時間に及ぼす影響

岩木信喜・小坂圭子¹⁾・近藤武夫²⁾・羽淵由子³⁾

Abstract

We examined whether in a context of reciprocal altruism (Trivers, 1971) the name of the imaginary cheater is efficiently retrieved because participants regulate their memory to check the behavior of the cheater. Sixteen graduate students participated in 2 parts of this experiment. In the first section, the subjects were required to read a passage in which the reciprocity of altruistic behaviors failed because of a cheating behavior. The characters in the passage were a cheater, a cheated person, and a neutral person (the interest variable). In addition, 2 conditions were provided concerning whether the subject's name was present in the passage as the cheated person or not (the participation variable). In the second section, the subjects performed a memory search task in which they selectively responded according to whether the name stimulus, which was presented on a display, was shown in the passage that they had previously read. If the cheater's name is efficiently retrieved because participants are regulating their memory for the aim of checking the behavior of the cheater, then the reaction time for the cheater's name should be shorter than that for the neutral one. Furthermore, such a difference in reaction time should be greater in the participation condition in which subjects themselves suffer damage compared to the non-participation condition. Results showed that the reaction time for the cheater's name in the participation condition was significantly shorter than that for the neutral person's name, but it was not so in the non-participation condition. Therefore these results support the above hypothesis.

要 約

本研究では、互惠的利他行動の文脈における裏切り者の名前が、再発チェックのために効率的に検索されるのかどうかを検討した。16名の大学生が2セッションからなる実験に参加した。被験者には、第1セッションで互惠的利他行動が破綻する文章を読ませた。文章には、裏切り者と裏切られる者、利害には無関係の中立者の3名が登場した(利害変数)。また、この文章読解では、被験者自身の名前が裏切られる者として登場するかどうかによって関与の有無を操作した(関与変数)。第2セッションでは、先の文章に登場した人物名かどうかを判断して選択的に反応する記憶探索課題を行った。もし裏切り者の検索過程が再発チェックのために効率化されるならば、その反応時間は少なくとも中立条件よりも短くなるはずであり、その程度は被験者自身に損害が及ぶと想定される場合の方が顕著であると予想された。実験の結果、関与有り条件では裏切り者に対する反応時間が中立条件よりも有意に短かったが、そのような差は関与無し条件では認められなかった。この結果は、先の予想を支持するものであった。

系統発生のプロセスを説明する理論に Darwin の進化論があり、その考えに立脚する進化心理学では、人の心的機能も身体器官と同様に自然淘汰の産物であると考えられている（例えば、Cosmides & Tooby, 1992）。進化という観点から見ると、心的機能もまた、食べ物を探したり、パートナーを見つけたり、子どもを育てるといった1つ1つの適応課題において有効かつ効率的に働くようにできているはずである。

人は言うまでもなく社会的な動物であり、日々の生活の中で様々な人間関係を営んでいる。その1つに“協力”関係がある。例えば、ある行動によって行動の仕手と受け手の双方に利益がある（その行動をしないときに比べて生存率と繁殖率の積としての適応度が上昇すると見込まれる）相互扶助や、行動の仕手が適応度上の不利益をこうむるにもかかわらず、受け手の方には利益があるような利他的行動がある。前者の相互扶助では誰もが利益を得るのでそのような協力行動が進化することは容易に理解できるが、後者の利他的行動の場合は、その進化が可能となるために次に示すいくつかの条件が必要である。すなわち、長谷川・平石（2000）がまとめているように、(a)行動の仕手のコストよりも受け手の利益のほうが大きい利他行動が、(b)同一の個体間で、立場を交換して長期間にわたって繰り返し行われ、(c)利益を得ながら、自分がコストを払って利他行動をしようとはしない個体に対して報復が行われる、という条件が必要である。これらの条件が満たされる場合に利他的行動が進化し得ると考えられており、このアイデアは互惠的利他行動の理論 (Trivers, 1971, 1985) として知られている。(a)と(b)の2条件は利他行動が交互に行われることによって双方の個体に利益があることを可能にする条件である。(c)はその進化を可能にするもう1つの必要条件であり、そこに示されている裏切り者に対する報復行動はそれ自体が協力行動に特化した1つの領域特殊的な適応課題である（領域特殊性については、長谷川・長谷川, 2000を参照のこと）。これまでに、報復のための前提となる裏切り者検知の心的メカニズムの存在を示すデータが得られており、概ね支持されている（例えば、Cosmides, 1989; Gigerenzer & Hug, 1992; 平石, 2000。ただし反論としては、Cheng & Holyoak, 1989; Cummins, 1996, 1999）。

ところで、これまでの研究では裏切り者が検知された後のこととしては報復があるとしか言われていないように思われる。それでは、検知された裏切り者は即座に報復を受けるのであろうか。少なくとも人間の場合は、一度の裏切り行為だけでその人に報復することは少ないように思われる。すなわち、一度目の裏切りから実際の報復までにはある程度の期間があり、その間は積極的に裏切り行為の再発をチェックしていると考えたほうが理解しやすいのではないだろうか。再発チェックという認知活動に焦点を当てるならば、裏切り者の個体識別を効率的に行い、その個体にたえず注意を向けることが大切な作業になると考えられる。つまり、裏切り者の検知後は、その者の個体識別を効率的に行えるように記憶過程が調整されることが考えられる。また、裏切りによる被害が自分に直接及ぶ場合のほうがそうでない場合よりも、そのような調整と再発チェックはより効率化すると予想される。

そこで、上記の予測を検証するために次のような実験を行うことにした。実験は2つのセッションで構成され、被験者は第1セッションにおいて互惠的利他行動が破綻する文章を読む。その文章には利他行動の仕手、利他行動の受け手、互惠的利他行動には関わらない中立者の3者が登場する。内容としては、以前に受けた利他行動に対するお返しをしない行為、つまり裏切り行為が描かれている。次に第2セッションにおいて、個体識別のための記憶探索過程が効率化されているかどうかを検討するため、これまで記憶探索過程の性質の検討のために用いられてきた

Sternberg (1966, 1969) の記憶探索課題を用いることにした。本実験では、人の名前をパソコンのモニターに1度に1つずつ継時的に呈示する。そして、先の第1セッションで読んだ文章の登場人物の名前がディスプレイに呈示されれば、できるだけ早く左右のボタンの一方を押し、その他の名前であれば他方のボタンを押すという課題を行う。このようにして、登場人物に対する反応時間を記憶探索に要する時間の関数として測定する。また、関与の有無は、被験者が文章を読む際に、裏切られる人物になったつもりで読むかどうかによって操作する。

以上のような実験では、次のような反応時間の傾向が予想される。裏切り者の個体識別が再発チェックのために効率化されるならば、その反応時間は少なくとも中立条件の人物よりも短くなるはずである（利害変数に関する効果）。ただし、それは、自分自身に損害が及ぶ場合により顕著であることが十分に予想される。例えば、被験者自らが利害に関与するようにイメージする関与有り条件では、関与しない条件よりも再発チェックのための個体識別過程が効率化されると考えられる。したがって、そのような変数操作を行った場合には、裏切り者と中立条件との差は関与有り条件の方が関与無し条件よりも大きくなるはずであり、これは関与の有無と利害変数との交互作用として認められると予想される。

方 法

被験者

大学院生16名（男性8名、女性8名）が実験に参加した。実験の都合上、被験者は、名字の読みがひらがな3文字の者に限定した（例えば、“やまだ”）。年齢の中央値は男性が26歳（範囲：22歳-28歳）、女性が26歳（範囲：24歳-33歳）であった。

実験計画

実験は2つのセッションで構成した。被験者には、第1セッションで互恵的利他行動が破綻する文章を読ませたが、これには被験者自身の名前が裏切られる者の立場に登場する関与条件と、あくまでも自分とは無関係なストーリーとして読む関与なし条件の2条件を設けた。第2セッションでは、先の文章に登場した人物の名前とそれ以外の名前を見分けて選択的に反応するSternberg (1966, 1969) の記憶探索課題を行った。

実験計画は、性変数を被験者間要因、関与の有無と利害関係の変数を被験者内要因とする2（性）×2（関与の有無）×3（利害関係：中立、裏切り者、裏切られる者）の3要因配置とした。性変数については特に予測を立てずに、探索的に検討することにした。

材料

刺激文 互恵的利他行動が破綻する文章として“近所づきあい”と“工場における人間関係”に焦点を当てた2種類のストーリーを作成した（資料参照）。文章には3名（仮に、A、B、C）の人物が登場し、生活に困ったA（裏切り者）に対してB（裏切られる者）が援助を与えるが、Aはその後Bが困ったときに援助を返すことを断るというあらすじとした。Cは利害という観点からは無関係である（中立条件）。3者の名前が現れる回数は同じとした。また、刺激の複雑性を可能な限り等しくするため、登場人物の名前をひらがなとし、字数を3文字に揃えた。

記憶探索課題 ひらがな3文字の名字を62名分用意した。そのうち6名分の名字を登場人物の名前として使用したが、そこには被験者の名前も含まれていた。これら6名の名前は半分を関与

無し条件（近所づきあいの文章）で用い、残りを関与有り条件（工場における人間関係の文章）で用いた。それら6名分を差し引いた56名分の名字はフィルター刺激として用いた。これらの刺激は、黒色の背景のディスプレイ（Iiyama製、型番LA702U）の中央に、白文字（40ポイント）で呈示した。被験者からディスプレイまでの距離は約40cmであった。

課題と手続き

刺激文の読解 被験者は、まず、互恵的利他行動の文脈が破綻する文章を通読した。その際、被験者には、登場人物3名の名前を記憶しながら読むこと、文章を読んだ直後に記憶探索課題を行うこと、さらに、登場人物に関する印象評定と文章理解の確認テストを行うことを、登場人物に対する注意を喚起するために教示した。また、関与有り条件では被験者名が文章中に含まれており、被験者自身が登場しているように想像しながら読むことを教示した。文章の通読は被験者のペースに任せた。関与有り条件と関与無し条件のいずれから始めるかについては、被験者間でカウンターバランスをとった。

記憶探索課題 被験者には、ディスプレイに呈示される名前が刺激文の登場人物名であるかどうかを判断して、左右のキーボードの反作用ボタンを左右の手で選択的にできるだけ早く押すように求めた。刺激呈示の制御と反応時間の測定には、心理実験用の刺激制御ソフト SuperLab Pro（Cedrus社製、バージョン2.01）を用いた。

1試行の流れは次のとおりである。始めに画面の中央に注視点“+”を500ms間呈示した。その後700ms間のブランク期間をおいてから、名前刺激を呈示した。刺激の消去は被験者の反応に同期させた。試行間間隔は1500msであった。登場人物の名前の時に左右いずれの手で反応するかについては被験者間でカウンターバランスをとった。

1ブロックは50試行で構成した。刺激文の3名の登場人物の名前と、刺激文にはなかった7名分のフィルター刺激を、それぞれ5回ずつ、ランダムな順序で呈示した。これを関与有り条件と関与無し条件でそれぞれ4ブロックずつ行った。1ブロックごとに被験者の疲労状態を確認して、適宜休憩をとった。

刺激文の理解度の測定 刺激文の理解が適切であったかどうかを確認するため、登場人物について、個人的見解としてどの程度好感がもてるかということと、それとは別に道義的観点（あるいは一般的見地）からどの程度評価できるかについて、それぞれ“とても悪い”（1点）から“とても良い”（7点）までの7段階で評定させた。最後に、内省報告を求めた。

結 果

以下の分散分析はすべて2（性）×2（関与の有無）×3（利害：中立、裏切り者、裏切られる者）の要因配置に基づくものである。交互作用が有意であった場合の下位検定の有意水準は5%（両側）とした。また、多重比較の方法としてはTukeyのHSD検定（ $p < .05$ ）を用いた。

まず、文章の理解度を確認したところ、どの被験者も文章中の登場人物の名前と立場（中立、裏切り者、裏切られた者）を正確に対応させていた。また、内省報告から、文脈の理解は正確であったと判断している。

登場人物に対する被験者の個人的な好感度の平均評定値をTable 1に示した。この平均評定値に関して分散分析を行ったところ、¹利害変数の主効果（ $F(2, 28) = 70.81, p < .001$ ）、及び、

性と利害の交互作用 ($F(2, 28) = 5.23, p < .05$) が有意であった。利害変数に関する多重比較では、好感度は裏切り者よりも中立、中立よりも裏切られた者の方が有意に高かった。交互作用の下位検定では、裏切り者 (男 < 女) と裏切られた者 (男 > 女) に性の効果があり、さらに、各性における利害変数の効果も有意であった。男性における利害変数の多重比較では、好感度は裏切り者よりも中立、中立よりも裏切られた者の方が有意に高かった。女性においては、好感度は裏切り者との比較で他の2条件の値が有意に高かった。

Table 2 に、登場人物に対する被験者の道義的観点からの判断の平均評定値を示した。この平均評定値に関して分散分析を行ったところ、利害変数の主効果だけが有意であった ($F(2, 28) = 75.79, p < .001$)。多重比較では、裏切り者よりも中立、中立よりも裏切られた者の方が、道義的観点からの評価は有意に高い値であった。

次に、反応時間の条件別平均値を Table 3 に示した。これらの平均値に関して分散分析を行ったところ、関与変数 ($F(1, 14) = 7.60, p < .05$, 有り < 無し) と利害変数 ($F(2, 28) = 29.31, p < .001$) の各主効果、及び、関与と利害の交互作用 ($F(2, 28) = 17.99, p < .001$) が有意であった。利害変数に関する多重比較では、裏切られた者に対する反応時間が他の2条件よりも有意に短かった。また、交互作用の下位検定では、裏切られた者における関与変数の効果 (有り < 無し) と、関与有り条件における利害変数の効果が有意であった。後者の多重比較では、中立よりも裏切り者、裏切り者よりも裏切られた者の方が有意に反応時間が短かった。Figure 1 にも平均反応時間を示したが、性変数については主効果や他の変数との交互作用が有意ではなかったため、性変数を込みにした場合の平均値を示した。

エラー反応率の条件別平均値を Table 4 に示した。エラー反応が認められなかったケースが少なからずあったので、各被験者の各条件のデータに0.5を加えた値を開平変換してから分散分析を行った (森・吉田, 1990)。その結果、関与変数と利害変数の交互作用だけが有意であった (F

Table 1. Mean rating values of characters' likeability as a function of sex, participation, and interest variables.

Sex	Non-participation			Participation		
	Neutral	Cheater	Cheated	Neutral	Cheater	Cheated
Male	4.1±0.6	1.3±0.4	5.4±1.0	3.9±0.6	1.4±0.5	5.6±1.0
Female	4.5±0.7	2.3±1.0	4.6±1.0	4.3±0.4	2.4±0.7	4.8±1.0

Note. Values after "±" indicate SDs. We used a questionnaire with a 7 point scale from 'very bad (1)' to 'very good (7)'.

Table 2. Mean rating values of characters' morality as a function of sex, participation, and interest variables.

Sex	Non-participation			Participation		
	Neutral	Cheater	Cheated	Neutral	Cheater	Cheated
Male	4.0±0.0	1.8±0.8	5.0±0.9	3.9±0.3	1.9±0.8	5.1±0.8
Female	4.6±0.7	2.1±0.9	4.8±0.7	4.1±0.3	2.5±0.7	4.9±0.6

Note. Values after "±" indicate SDs. We used a questionnaire with a 7 point scale from 'very bad (1)' to 'very good (7)'.

Table 3. Mean reaction times as a function of sex, participation, and interest variables.

Sex	Non-participation			Participation		
	Neutral	Cheater	Cheated	Neutral	Cheater	Cheated
Male	532±66	537±82	527±93	539±61	530±55	453±47
Female	501±61	500±54	507±61	505±61	472±73	432±35

Note. Values after “±” indicate *SDs*.

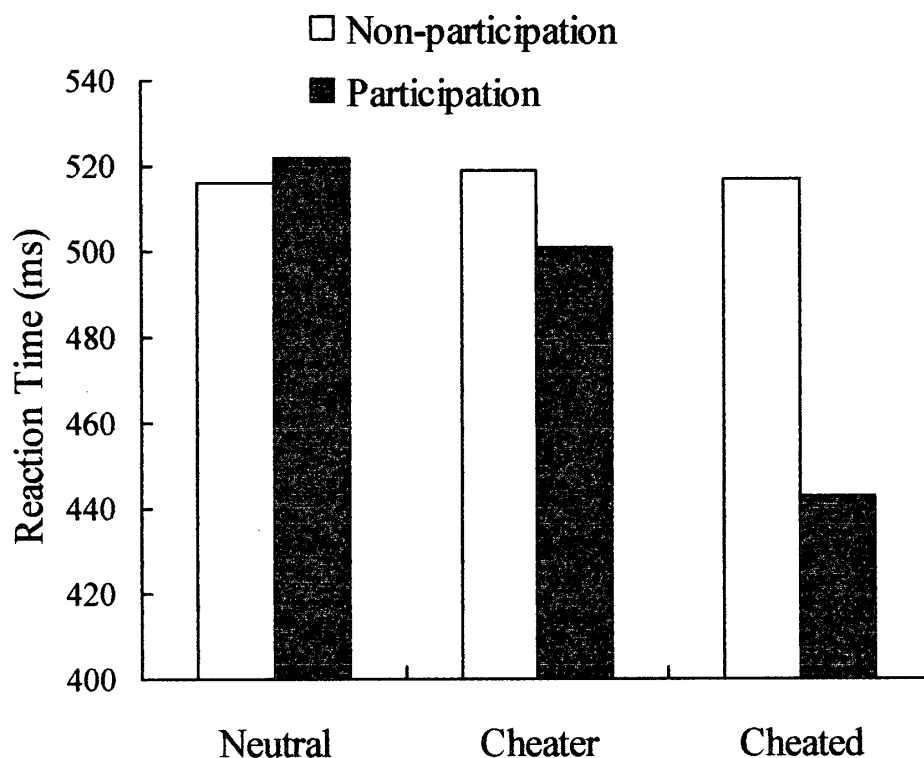


Figure 1. Mean reaction times as a function of participation and interest variables. The data in this Figure 1 were collapsed across sex because there was neither a main effect nor any interaction between sex and the other variables.

(2, 28) = 9.30, $p < .001$). 下位検定を行ったところ、裏切られた者（有り<無し）と中立条件（有り>無し）における関与変数の効果と、関与有り条件における利害変数の効果が有意であった。後者の多重比較では、中立条件の値が他の2条件よりも有意に大きかった。

考 察

本研究の目的は、互惠的利他行動の文脈において裏切り行為を示す個体があった場合、その個体の効率的な識別が可能となるように記憶過程が調整されるのかどうかを検討することであった。

まず、刺激文の理解に関して述べる。どの被験者も文章中の登場人物の名前と立場（中立、裏切り者、裏切られた者）を正確に対応させていたこと、好感度と道義的側面からの評価に関して裏切り者に対する評定値が中立条件よりも有意に低かったことから、文脈の理解は正確であった

Table 4. Mean error response percentages as a function of sex, participation, and interest variables.

Sex	Non-participation			Participation		
	Neutral	Cheater	Cheated	Neutral	Cheater	Cheated
Male	11.9±8.6	11.9±6.1	8.8±4.1	18.8±7.4	8.1±7.0	2.5±2.5
Female	6.9±4.3	10.0±9.0	12.5±9.7	11.3±8.6	9.4±5.8	5.6±5.3

Note. Values after “±” indicate SDs.

と考えられる。また、反応時間とエラー反応率とのトレード・オフは認められなかった。

性変数については、反応時間とエラー反応率にいかなる効果も認められなかった。利害関係の認識とその記憶過程には、本研究に関する限り性差がないことが示唆された。しかしながら、この点に関しては、データの信頼性という観点から今後もデータを蓄積する必要があるだろう。性変数は探索的検討を目的として設定したものであるためこれ以上は言及しない。

さて、裏切り者の個体識別が再発チェックのために効率化されるならば、その反応時間は少なくとも中立条件の人物よりも短くなるはずであり、これは、被験者自身に損害が及ぶと想定する場合により顕著であると予想された。反応時間の傾向はこの予想を支持するものであった。つまり、関与の有無と利害変数との交互作用が有意であり、その下位検定では、裏切り者と中立条件との差が関与有り条件の方が関与無し条件よりも大きく、また、関与有り条件でだけ有意であった。

しかしながら、予想とは異なるところもあった。当初は、関与無し条件でも裏切り者に対する反応時間が中立条件よりも短くなると思っていたが、これらの反応時間はほとんど同じであった。つまり、自分とは無関係の人間関係における利害というものは被験者本人にとってはあくまでも他人事であり、そのような場合には裏切り者を注意すべき人物としては見ていない可能性が示唆される。ただし、そのような他人事としての利害関係の認知は、今回の刺激文脈が被験者の学生にとっては日常的なものではなかったことによってもたらされた可能性もあるので注意が必要である。仮に日常的で馴染みのある文脈を設定すれば、将来そのような利害関係の当事者になる可能性が認識されやすくなる結果、利害変数の効果が認められるかもしれない。この点は改めて別に検討を要する課題である。

裏切られた者に対する反応時間については、関与無し条件では中立条件とほぼ同じであったが、関与有り条件ではその他2条件よりも明瞭に短かった。これは、裏切られた者の名前が被験者本人の名前であったことから、習慣強度という点で最も反応しやすい刺激であったためと考えられる（習慣強度の影響については、Clifton, 1973を参照されたい）。

以上から、互恵的利他行動の文脈においては、裏切り行為を示す個体の効率的な識別が可能となるように記憶過程が調整されることが示唆された。今後は、被験者にとってより馴染みのある場面を考慮した刺激文を作成して、データの信頼性を検討することが大切な課題と考えられる。

最後に、本研究では裏切り者の記憶探索がどのようなメカニズムで効率化されるのかは扱っていないが、少し述べておきたい。ここで注目したいのは、裏切り者に対して生じるネガティブな感情である。Bradley, Mogg, & Lee (1997) は、ドット・プローブ課題を用いた実験で、被験者の空間的注意が中立的な刺激よりもネガティブな意味合いの刺激の方により強く捕捉されることを示している。ドット・プローブ課題では、2つの単語が縦に並んだ状態でディスプレイに短時間

だけ呈示され、それらが消えた直後にどちらか一方が呈示されていた位置にドット刺激が呈示される。課題は、ドット刺激がどちらの位置に現れたかを判断して、それに対応するボタンをできるだけ早く押すことである。このような課題を行うと、ネガティブな意味合いの単語が呈示された位置にドットが現れた方が、中立的な単語の位置に現れるよりも被験者の反応は早くなる (Bradley et al., 1997)。このように、被験者の注意はネガティブな意味合いの単語が呈示された位置により強く捕捉されるようである。Taylor (1991) や池上 (2000) も考察しているように、不快な事態をもたらす可能性のある対象には、個体防御のためにより多くの注意資源が配分されると考えられ、そのようなメカニズムによって不快な裏切り者の記憶探索過程も効率化している可能性が示唆されるのである。

注

1. Table 1 と Table 2 には床効果を示しているデータが一部含まれているので、標本分布の正規性という観点から分散分析を行うことには慎重でなければならないが、ここでは参考資料とするために分析した。

文 献

- Bradley, B. P., Mogg, K., & Lee, S. 1997 Attentional biases for negative information in induced and naturally occurring dysphoria. *Behavioral Research and Therapy*, 35, 911-927.
- Cheng, P. W., & Holyoak, K. J. 1989 On the natural selection of reasoning theories. *Cognition*, 33, 285-313.
- Clifton, C., Jr. 1973 Must overlearned lists be scanned? *Memory & Cognition*, 1, 121-123.
- Cosmides, L. 1989 The logic of social exchange: Has natural selection shaped how humans reason? Studies with the Wason selection task. *Cognition*, 31, 187-276.
- Cosmides, L., & Tooby, J. 1992 Cognitive adaptations for social exchange. In J. H. Barkow, L. Cosmides, & J. Tooby (Eds.), *The adapted mind: Evolutionary psychology and the generation of culture*. New York: Oxford University Press. pp.163-228.
- Cummins, D. D. 1996 Evidence for the innateness of deontic reasoning. *Mind and Language*, 11, 160-190.
- Cummins, D. D. 1999 Cheater detection is modified by social rank: The impact of dominance on the evolution of cognitive functions. *Evolution and Human Behavior*, 20, 229-248.
- Gigerenzer, G., & Hug, K. 1992 Domain-specific reasoning: Social contracts, cheating, and perspective change. *Cognition*, 43, 127-171.
- 長谷川寿一・長谷川真理子 2000 進化と人間行動 東京大学出版会
- 長谷川寿一・平石 界 2000 進化心理学からみた心の発生 渡辺茂 (編著) 心の比較認知科学 ミネルヴァ書房 Pp.383-439.
- 平石 界 2000 進化心理学：理論と実証研究の紹介. 認知科学, 7, 341-356.
- 池上知子 2000 感情の自動性と表情. 心理学評論, 43, 320-331.
- 森 敏昭・吉田寿夫 1990 心理学のためのデータ解析テクニカルブック 北大路書房
- Sternberg, S. 1966 High-speed scanning in human memory. *Science*, 153, 652-654.
- Sternberg, S. 1969 Memory-scanning: Mental processes revealed by reaction-time experiments. *American Scientist*, 57, 421-457.
- Taylor, S. E. 1991 Asymmetrical effects of positive and negative events: The mobilization-minimization hypothesis. *Psychological Bulletin*, 110, 67-85.

Trivers, R. 1971 The evolution of reciprocal altruism. *Quarterly Review of Biology*, 46, 35-57.

トリヴァース, R. 中島康裕・福井康雄・原田泰志 (訳) 1991 生物の社会進化 産業図書 (Trivers, R. 1985 *Social evolution*. Menlo Park: Benjamin/Cummings Publishing Company.)

資 料

“近所づきあい”の刺激文

ある町に、ながたさん、たぐちさん、くろきさんという三人がご近所どうしで暮らしていた。彼女らは同じ地区の生まれ育ちであり、みな同地区の男性と結婚したので、ずっとご近所どうしで生活していた。

彼女らにはみな子どもがいる。ながたさんは幼稚園の年長組、たぐちさんは小学校1年生に入学したばかりと、1年だけ学年が違うものの、歳の近い子供がいた。くろきさんだけは二人より少し年上の6年生になる子供がいた。くろきさんはいくぶん年上の子供を持つ先輩として、ながたさんとたぐちさんの二人にいろいろと助言してあげていた。不況のあおりもあって、三人の暮らしは豊かとは言えなかったが、何事につけても困ったときにはお互いに余裕のある方に助けてもらっていた。

ある日、たぐちさんが、頼みごとがあるのだ、とながたさんのもとを訪れた。くろきさんから助言は受けていたものの、小学校に上がってこんなにお金がかかるとは少々甘く見すぎていた、数日後に払い込まねばならないものがあるのだが、今、現金が手元になくてどうしようもない、というのだ。くろきさんには修学旅行を控えた6年生の子供がいる。さすがにそんなくろきさんに借金を頼むのはこころ苦しいので、たぐちさんはながたさんを頼ってきたのだ。困ったときはお互い様と、貯金から5万円を貸してあげた。そのお金は3ヶ月ほどしてから返してもらった。

ちょうど一年後、今度はながたさんの子供が小学校に上がった。そしてやはり、くろきさんの助言を受けて分かってはいたものの、去年のたぐちさんのように、子どもの小学校入学後の出費が響いて、家計が非常に苦しくなってしまった。とはいっても教育費その他、支払わなければならないお金の額はどんどん増えていく。くろきさんは子供が今年の春中学校に入学したので、とてもお金を貸してくれる余裕はないだろう。困ったながたさんはたぐちさんに相談してみた。

ところが、たぐちさんには少々貯金もでき、暮らしにも余裕があったが、そのお金は何かの楽しみに使いたいからということで、ながたさんは助けてもらえなかった。

“工場における人間関係”の刺激文

ここに社長以外に社員はあさださんと、いしいさん、えもとさんの3人だけ、という非常に零細な工場がある。主に親会社から発注されるこまごまとした機械を製造している。3人はみな同地区の生まれ育ちであり、それぞれ近所に家庭をもって暮らしていた。

3人の暮らしは長引く不況のあおりでけっして豊かなものではなかったが、そうかといってもっとよい条件の職場に転職できる見こみは、当分の間ありそうになかった。何事につけても困ったときにはお互いに余裕のある方に助けてもらい、仕事や生活を維持していた。

そのような中、ある日、いしいさんがあさださんの家へやってきた。聞けば、いしいさんは親

類の結婚式に出席するため、お祝いや交通費などのお金が必要になったが、余裕がないので貸して欲しいということである。えもとさんにも頼んでみたが、そのときはえもとさんのお子さんが進学を控えていて、貯金をどうしても教育費に当てねばならなかったもので、工面してもらえなかった。そこで、いしいさんは頼みの綱のあさださんに話を持ってきたのだった。その金額は貯金で十分にまかなえたので、あさださんはそれを工面してやった。そのお金は3ヶ月ほどしてから返してもらった。

それから1年ほどした頃、あさださんの親類が大病を患った。遠方だが見舞いに行かねばならず、見舞金も必要だった。しかし、最近小学校にあがった子どもの教育費に貯金を当てねばならなかったもので、お金の工面に困った。えもとさんにお金を借りようかと考えたが、えもとさんにも自分と同じ年の子どもがいた。そのためおそらく自分と同じようにえもとさんもお金に余裕はないだろうと容易に想像できて、少々頼みづらかった。そこで、いしいさんに相談してみた。

しかしながら、いしいさんには少々貯金もでき、暮らしも楽になっていたが、そのお金は何かの楽しみに使いたいからということで、あさださんは助けてもらえなかった。